

ベトナム・ハタイ省 ドンラム村の民家調査

はじめに 2004年度の奈文研職員による現地調査は、5月、8月、12月の3度（各1週間程度）おこなった。5月と8月には、前年度に委託したハノイ建築大学と建築研究所の成果を受けて、ドンラム村内2集落（モンフー・カムティン）の悉皆調査（計515戸）を中心におこない、あわせて壁や舗装・水路・井戸など集落環境施設の調査を実施した。また、この悉皆調査成果にもとづき、古様を残すと思われる民家・祠堂などについて詳細調査をおこなった。12月にも同様の詳細調査を実施し、合計29件41棟について具体的な建物の様相を把握した。ここではドンラム村の民家主屋の大要を述べ、古様を残すモンフーII-55主屋の特徴を挙げて編年の試案を示したい。昨年度までの調査経緯は『紀要2004』参照。

主屋の一般形式 各戸の敷地は建物や塀で囲まれた閉鎖的な空間で、街路に面して門を開き、主屋と台所、家畜小屋などからなる。敷地の中央部に庭をおき、庭に面して主屋を向けるため、主屋正面の方位はとくに定まっていない。主屋の基本形は切妻造瓦葺だが、20世紀初頭を境に内部柱を抜く構造となり、また、数年前からコンクリート造陸屋根の新形式が現れはじめた。

20世紀初頭以前の伝統形式は、軸部・小屋組とも木造で、背面および側面を石材やレンガで壁をつくる。間口は5間もしくは7間で、中央3間を主室、両脇間各1間ないし2間を側室とする。奥行1間の身舎の前後にそれぞれ庇・孫庇を葺き下ろして切妻造の屋根をつくる。正

面1間通りは吹き放しで、腰壁を入れて内開きの扉を備える。

柱は総柱で省略しない。上下とも粽をもつ内転びの円柱で、身舎の虹梁、庇・孫庇の登梁を柱に輪薙ぎ込む。間口・奥行方向とも繫材を入れて軸部を固め、円形断面の母屋を渡してゴヒラの垂木をかける。虹梁上には2本の円束を立てて二重虹梁を受け棟木を支持するが、円束より外側の母屋を受ける架構が、登梁の形式と正崩し状の幾何学形態の材（図26）とするものとに分かれる。主室-側室境の主室側壁面は、架構がやや異なり、また部材だけでなく開口部、壁体など彫刻による装飾が豊かである。正面軒先の桁を支持する出梁部分にも彫刻を施す。主室の虹梁下面には、阮朝嗣徳年間（1848～1883）頃から銘文をもつものが現れはじめ、元号や干支から建立年代の判明するものがある。それより古い主屋でも、18世紀に遡るものはごく少ないと考えている。

モンフーII-55主屋の特徴 上記の要素と照らして、この主屋が特徴的なのは、主室の架構が特異な点である（図27）。すなわち虹梁上の母屋を受ける部材が、横架材と短い束で積み上げられ、正崩し状の架構に先行するものと考えられる。室境の架構も短い束を介して横架材を重ね、その端部で母屋を受ける形式で、古い形態を保持しているものだろう。さらに、虹梁下に銘文を記すようになると、次第にその周囲を彫刻で飾り、また銘自体も部材から刻み出すなど華やかになるが、おそらくこの主屋はそれ以前、すなわち19世紀前期もしくはそれ以前に遡る遺構と思われる。今後は家格なども考慮に入れながら、編年観を詰めていきたい。

（箱崎和久）



図26 モンフーIII-105宅の主屋内部（嗣徳10年＝1857）



図27 モンフーII-55宅の主屋内部